

【特集：橋本毅彦先生ご退職記念】

学生時代の思い出

中村 征樹¹

この原稿を書くにあたって学生時代の記憶を振り返ろうとして、愕然とした。「進振り」で科学史・科学哲学研究室へと進学してから、もう30年近くが経とうとしているのである。

理論物理の研究に憧れて理科一類に入学したのが、いまからちょうど30年前の1993年。その翌年の夏には、紆余曲折の末、科哲に進んだ。そこではじめて橋本先生の授業を受講することになった。いま思えば、当時、橋本先生はまだ37歳。いまの私の年齢より一回り近く若かったことになる。

授業は、学部後期課程の共通科目で、受講生は20～30人前後だったように思う。内容は、橋本先生が当時、放送大学で担当されていた科学史の通史の授業教材に沿ったものだったように記憶している。期末レポートでは、「科学と宗教」をテーマにすることにした。授業で聞いた近代科学とキリスト教の関係が、科学史に触れたばかりの私の興味を掻き立てたのだろう。いったいどんな文献を読めばいいのか。そんなことを橋本先生に相談したのだと思う。『神と自然—歴史における科学とキリスト教』（D. C. リンドバーグ／R. L. ナンバーズ編、渡辺正雄監訳、みすず書房、1994年）をはじめ、いくつかの日本語の文献を紹介された。図書館で借りた『神と自然』の重厚さに圧倒されるとともに、科学史研究の醍醐味を感じるようになった。

ただ、それ以上に印象的だった出来事がある。冬休みになる頃だろうか。当時、自宅生だった私の実家に電話がかかってきた。橋本先生から、である。電話をうけた母は橋本先生の腰の低さに感服していたが、それはともかく、電話の内容は、科学と宗教に関する英語文献に関してのものだった。その後、レポートに関連する章のコピーをお送りいただいたように思う。学部2年生の一人の

1 大阪大学全学教育推進機構教授。同大学院人文学研究科人文学専攻科学技術社会論専門分野教授。E-mail: n.masaki.celas@osaka-u.ac.jp

受講生の、しかも期末レポートに関する質問に、それほどまでに丁寧で親切な対応をしていただいたことに、大きな驚きを覚えた。さすがにレポートに手を抜くことはできないとも思った。科哲に進学してから数か月後の出来事だった。

実を言えば、科哲に進学した当時、科学史を専攻することはほとんど選択肢に入っていなかった。むしろ関心があったのは、哲学だった。それが、3年生になってから比較的早い時期に科学史を専門に選ぶことになった。その原因の一つが、橋本先生の授業で科学と宗教をテーマにレポートを書こうとしたこと、そこで科学史研究の醍醐味に触れる経験をしたことだったのではないか。当時、明確にそのように意識していたわけではないが、いまになって振り返ってみると、そんな気がしてくる。

その後、橋本先生に指導教員になっていただき、学部4年生にあがる頃、フランス革命下で設立された高等技術教育機関であるエコール・ポリテクニクを研究テーマに選んだ。それと相前後して、橋本先生は先端研（先端科学技術研究センター）に異動された。といっても、科哲では兼任教員としてこれまでどおり授業も指導も行っていたので、学生としては、たんに研究室の物理的な場所が、駒場キャンパスから5分ほどの距離にある先端研に移っただけ、というくらいの印象だった。卒論を書き、修士課程に進学する際にも、そのまま総合文化研究科に進んだ。

修士課程に進学してから半年ほど経った時期に履修した演習の授業は、これまで大学で受けた授業のなかでもっとも記憶に残るものだった。受講生は私一人だった。毎週、橋本先生と先端研の研究室で、啓蒙期から革命期のフランスにおける技術と権力の間を駆け巡った Ken Alder の *Engineering the Revolution* (Princeton University Press, 1997) や、同時期のフランスの土木学校の設立と土木技師の活動を明らかにした Antoine Picon の *L'invention de l'ingénieur moderne* (Presses de l'école nationale des Ponts et Chaussées, 1992) など、研究テーマに深くかかわる英語やフランス語の文献を読んでいくことになった。受講生が一人なので、毎週、レジュメを準備することになった。毎回、授業の前日は徹夜だった。しかも、私が Alder の本の5章のレジュメを担当したときには、橋本先生

が6章のレジュメを担当されるなど、毎回、2人ともがレジュメを準備する形だった。おぼろげな記憶をたどると、授業はおそらく4限目、14:40頃からで、準備がいつもぎりぎりになっていた私は、たいてい多少遅れて先端研の研究室に到着した。たまに時間通りに到着したときには、橋本先生もまだレジュメをまとめている最中だったこともあった。授業は3、4時間続き、途中でケーキ休憩が入ったりした。かなりハードではあったが、きわめて恵まれた、充実した時間だった。生産技術研究所が六本木から移転してくる前で、先端研のあるキャンパスもまだだいぶゆったりした空気をまとっていたように思う。まだ国立大学が独立行政法人化される前のことだ。

翌年の演習の授業は、専門のアカデミー研究にとどまらずに八面六臂の活躍をしている隠岐さんをはじめ、同時期のヨーロッパをフィールドに研究活動を行っている学生が増えていたこともあり、その人たちにも声をかけての演習となった。一対一の演習は、きわめて恵まれた環境ではあったものの、かなりハードだったこともあり、そのような形に拡大して実施することを橋本先生に提案したのだった。演習の形が変わったことで、前年とは異なった形で学問的刺激を受けることになり、充実した機会にはなったが、いまになって思うと、やはりもったいなかったかも、とも思う。その頃から、橋本研は指導学生や海外からのポストクも増え、拡大していった。

博士課程では、先端研に設置されている工学系研究科先端学際工学専攻に進んだ。博士課程在学中のほぼ半分くらいの期間は、研究指導委託などの仕組みを活用して、フランスで研究に従事した。そして帰国後、助手として受け入れていただき、非常に自由な助手生活を送らせていただいた。2006年春、橋本先生が先端研での任期を終えて駒場に戻ったタイミングにあわせて、私も文部科学省科学技術政策研究所（現、科学技術・学術政策研究所）に研究官として異動した。そしてその一年半後、大阪大学に着任することになった。それから、ふと気づけばもう15年以上が経つ。

この間、時流に飲まれて、研究不正問題や、科学コミュニケーションなどに研究の重点が移っており、科学技術史の分野で十分な研究活動が展開できてい

ないことには、忸怩たる思いを感じている。大学をとりまく環境は、30年前と比べても大きく変わってきた。そのなかで、研究や教育に腰を落ち着けて取り組むことが難しくなっているということは、しばしば指摘されることではある。しかし、やはり私自身にとって、学生時代に橋本先生から受けた多大なる学恩は、研究者の道を志すにあたってきわめて大きな影響を与えるものであった。この文章を書いていて、そのことをあらためて実感した。今後の教育・指導において、学生時代にうけた学恩に多少なりとも報いられるよう努めていきたいと思う。